

積み上げられた音楽 (東京リ - ダ - タ - フェル55年史より)

昭和55年3月発行

作曲家 全日本合唱連盟名誉会長 清水脩

私が「東京リ - ダ - タ - フェルフェライン」(旧名)の名をきいたのは、もう随分前だと思っていた。そのはず、今年(昭和55年)は創立から数えて55年になると教えられた。

その年、大正14年、私は旧制中学2年生であった。歌うことに興味を覚えはじめたのはその時分である。卒業して大阪外語に入学と同時にグリー - クラブに籍をおいた。リ - ダ - タ - フェルの名をきいたのは、丁度そのころである。しかし、名前だけで、実際の演奏をきいたのは、それからさらに10年近くも経ってからである。

多分、それは昭和24年か25年だったと思う。何かの合唱の会できいたように覚えている。どんな曲だったのか大方は忘れてしまった。しかし、男声合唱の魅力にとりつかれていた私に、強烈な衝撃をあたえたことだけはたしかである。前後するかもしれないが、藤井清水作曲の「拳骨節」だけが、妙に耳にこびりついてはなれなかった。その外ではウェルナ - の「ステンチェン」もあったかも知れぬ。外語時代に、この曲にうつつを抜かしたからでもあったのだろう。

たしか、その頃「東京リ - ダ - タ - フェルフェライン」は15名足らずのメンバ - だった。半円形に列にならび、トップテノ - ルの一番左の端の人が、音叉を右手ににぎって歌いながら指揮をしていた。その人が秋山日出夫である。が、彼の名を知り、戦中から戦後にかけて、一緒に仕事をする仲になろうとは、その時は思いもしなかった。何とも言いようのない憧れの気持ちできいていただけである。

戦争が終わり、合唱連盟ができたとき、始めの2年ほどは、まだ東京リ - ダ - タ - フェルとのごちかの接触はなかった。秋山日出夫が連盟の中枢にはいり、私と2人で連盟の仕事に打ち込み始めてから、秋山を通して、ターフェルの魅力が、何であるかがわかってきた。ひとことでいうと、「人間くさい」演奏が聴くものをとらえてはなさなかった。何回もコンク - ルで優勝し、アマチュア合唱団の中心的存在であった。その根元には、音楽を形であらわすのではなく、情感の深さでせまってくるものがあった。わずか10数人のメンバ - だが、ステ - ジで歌っている1人1人の表情には、息のつまるような切迫感などというようなもの - これは最近の合唱団では当然の事のようになっている - は、みじんもなく、「どうだ、こんな楽しいものがほかにあるかい」といったようなものがただよっていた。「人間くさい」というのはその所である。

そこへいくと、私などは性来、音楽を多分に堅苦しく考えすぎていたので、ターフェルの音楽は、まるで別世界のもののように思えてならなかった。そして、そういう別世界の存在に、驚きと同時に、1種の羨望に似た気持ちを抱くのであった。それはまた、私自身の作品にも少なからぬ影響をあたえずにはおかなかった。「月光とピエロ」などにその跡が見られるのではないかと思っている。 以下略。